

日本社会心理学会会報

202 号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 池田謙一

〒602-8580 京都市上京区新町通今出川上ル 同志社大学社会学部 池田研究室

2014 年 6 月 23 日

日本社会心理学会第 55 回大会・開催迫る!!

いよいよ間近に迫った今年度大会。発表予定の方々はそろそろ腕を撫しておられる頃かと存じます。大会準備委員長からのメッセージ第 2 弾を頂戴しました。多くの新企画を活かした盛会となりますように。

大会準備委員長 亀田達也

社会心理学会第 55 回大会まで、いよいよ、あと一ヶ月ばかりとなりました。

既にご案内しましたように、プログラム(確定版)を大会用の web サイトで公開中です。今大会の発表申込件数は、口頭発表 128 件、ポスター 259 件、会員企画のワークショップ 6 件を数え、多くの会員の参加が見込まれます。

“The early bird catches...”に倣い、2 日目の朝 8 時からキーノートが行われます。下條信輔先生(California Institute of Technology 教授)からは“Three distinctive levels of social brain”, 長谷川眞理子先生(総合研究大学院大学教授)からは「ヒトの生活史の進化における思春期の意味」と題した講演をそれぞれ行っていただく予定です。冷涼な朝の空気のなか、最先端の研究講演にどうぞご期待ください。

また、会員企画のワークショップは、次の 6 件です。

- ・「文化」の単位を問う：地域・生業・国家比較を通じた検証
- ・自由意志信念と決定論的信念をめぐって
- ・規範研究、再開拓 - 「多元的無知」を切り口に
- ・文化変容と維持：「こころの性質」の変化についての社会・文化心理学的考察
- ・消費者の「触覚」を改めて問い直す
- ・“わたし”が“われわれ”になるとき - 集団行動への学際的アプローチ -

会員間の研究交流の促進を最大かつ唯一の目的とする本大会では、並行セッション数を 4 つに押さえ、ポスターセッションだけの時間帯を両日も 2 時間ずつ設けています。初日のポスターセッションは、北海道らしく、晴天であれば屋外で行うことを企画しています。このポスターセッションは研究懇親会を兼ねており、無料のドリンク(アルコールのみ有料です)とスナックを用

● 今号の主な内容

- 【1 面】第 55 回大会案内
- 【2 面】春の方法論セミナー参加記
- 【3 面】夏の合宿セミナー案内
- 【3 面】第 58 回公開シンポジウム案内
- 【5 面】大学院生・若手研究者海外学会発表支援制度・支援対象者の決定
- 【6 面】研究会紹介：名古屋社会心理学研究会
- 【6 面】若手会員，声をあげる
- 【8 面】常任理事交代に関する公告
- 【9 面】会員異動、『社会心理学研究』掲載予定論文

意いたします(なお、本格的な夕食については、研究懇親会終了後、多彩な選択肢をもつ Sapporo を各自ご探訪ください)。また新たに、ポスターセッションの中に「インフォーマルポスター」を企画しました。会員であれば事前登録なしで発表できます。希望者は、ポスター会場内のスペースを各自ご利用下さい(掲示時間はポスター発表に準拠します)。

大会翌日の 7 月 28 日(月)には、International Congress of Neuroethology(7 月 29 日-8 月 1 日)と共同で、“Making of Humanities: Biological Roots of Mathematics and Cooperation - A joint workshop of Social Psychology and Neuroethology”と題した国際シンポジウムを開催します(<http://icn2014.jp/satellite/joint.html>)。国内外の先端研究者との異分野交流に関心のある方はぜひご参加ください。

7 月の札幌は「北海道人」にとって短い夏を野外で存分に謳歌する季節ですが、道外からお越しのみなさまには朝晩肌寒く感じることもあるかもしれません。初日夕方に屋外でポスターセッションを行う場合には、念のため一枚上に羽織れるものがあつた方がよいかもしれません(とは言え、今年の 6 月初旬には、北海道で 2 日連続猛暑日を記録し、15 地点で最高気温の記録を更新しました)。

皆様には夏休み直前のお忙しい時期と存じますが、7 月 26・27 日の両日、「北の大地」でお目にかかれまことを、一同、心よりお待ちしております。(かめだたつや・北海道大学)

春の方法論セミナー参加記

会報 201 号で既報のとおり、2014 年 3 月 18 日に開催された「春の方法論セミナー: あなたの実験結果、再現できますか? false-positive psychology の最前線」は、多くの参加者があり、また動画配信 (記録) の視聴を通じて会員のみならず多くの方々にリーチしました。今号では当日の会場参加者のお一人からコメントを頂戴しました。

再現可能性と社会心理学の未来をめぐる 熱くて濃い一日の雑感

清成透子

思い起こすこと約 10 年前、ES 細胞にまつわる捏造論文騒動が巻き起こった際には「巨額の研究資金が動く分野は大変。(でも金儲けから縁遠い分野は無関係)」と完全に他人事であった。昨今、社会心理学でも同様の騒動を聞くにつけ、自分の予知能力 (Bem, 2011) のなさを実感する。とはいえ、捏造自体は一部の不心得者のなす所作に過ぎず、防止策に学会全体でコストをかけるのは費用対効果の面では疑問に思う。その意味で、今回の「春の方法論セミナー」では、捏造問題や解決策そのものではなく、



データの再現可能性問題により焦点を当てていたことや、今後

の社会心理学全般における研究のあり方や方法論を考えさせる企画であったのは素晴らしい。ちなみに、私自身がこのセミナーに (動画配信があるにも関わらず) わざわざ足を運んだのは、再現可能性問題目当てではなく、大久保街亜先生と岡田謙介先生のお二人が会員でもないのにわざわざ社会心理学者のためにご登壇されたからである。お二人の著書『伝えるための心理統計』(勁草書房) で効果量や信頼区間についてようやく一通り学ぶことができた身としては、再現可能性問題に関連した形でお話を伺う機会は願ったり叶ったりであった。ちなみに、昨年年度大会では吉田寿夫先生が効果量や信頼区間に関するワークショップを開催されていたのだが、セッションの都合上私自身は参加できず、大変残念な思いをした。今回、フロアに吉田先生がいらして質疑応答時にご発言をお聞きできたのは嬉しい誤算であった。このような企画を実行してくださった新規事業委員会の方々に心から感謝する。

セミナーでは、最初に竹澤正哲先生が軽妙洒落なトークで総括された通り、再現できない研究結果の多さは、社会心理学全般に対する信頼性を揺るがす忌々しき問題である。ある実験結果が擬陽性である確率がゼロではない以上、科学的な手法、つまり、追試という名の集合知によってこの問題は科学的に解決されるべきである。そう考えると単なる追試研究では学術雑誌に掲載されにくいのは問題かもしれない。とりわけ、なぜそういったメカニズムを人間が備えているのか究極因を明らかにしないまま、現象の面白さのみで果敢に勝負をかけている (ように見える) プライミング研究においては、再現可能性問題は深刻であろう。正直言うと、私自身はプライミング研究に関して、時々漏れ聞く所謂「セクシー」(大久保, 2014) な研究結果に「へー、マジ?」と思う程度で、知見自体に頑健性が担保されているとも思っていなかった。そのため、老人プライミング研究は再現できないと聞いたところで、今まで追試がなかった点にこそ驚きはすれ、再現できないこと自体には「さもありなん」と思った程度である。まさか、社会心理学全体を揺るがす再現可能性問題へと展開するとは、ここでも予知能力は持ち合わせていなかった。

もちろん、再現可能性を問わないこと自体が科学としてはナンセンスなので、昨今の動向は至極当然であり、これまでこの問題を放置していたのであれば学会としても深刻な問題であろう。ただし、私自身は社会心理学全般でこれまで再現可能性について全く無関心であったとは思っていない。単なる追試研究が学術誌に掲載されにくいのは、それ自体では発展性がないため当然と言えば当然である。むしろ、その後の発展性について全く示唆のない単なる追試実験にしかならないのであれば、その一発の打ち上げ花火的な研究の意義そのものが疑わしく、他の研究者がさらなる時間、お金といったコストをかける価値があるとも思えない。したがって、無差別に再現可能性を検討することについては、私自身はあま

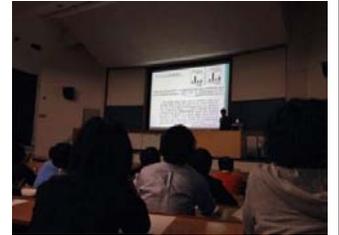
り関心を覚え

ない。これに対して、理論的に重要なテーマであ

れば、概念的追試を含む様々な角度から再現性を検討することで、より一層の理論的発展が見込め、単なる追試研究には留まらない $+ \alpha$ が備わる。もし、知見の再現が困難であれば、理論が間違っているのか、あるいは、何か別の重要な要因を見落としているのか、再現実験を通して新たな検討が可能となる。たとえば、我田引水となって恐縮だが、最小条件集団状況で内集団バイアスが生じるという Tajfel (1970) の有名な実験の再現は実は容易ではない。けれども、この再現性を検討する過程で「隠された」相互依存性の存在に気づき、それが集団内に閉じた互酬性に対する期待を生み出し、結果的に内集団ひいき行動が生起することを我々は明らかにした (e.g., Yamagishi, Jin, & Kiyonari, 1999)。なぜそういった行為を人間は行うのか、why に対する疑問を突き詰めたからこそその展開である。

結局、再現可能性問題は、研究の背後にどのような理論を想定するかを抜きに議論しても意味はないと私自身は考える。プライミング研究の場合、人間がなぜそういったプライミングの影響を受けるのか、その背後にあるメカニズムについての考察抜きに追試実験を実施しても、わずかな実験状況 (手掛かりなど) の違いの重要性を見落としたままであれば、再現可能性に大きく影響し、不当に低く再現性を見積もられるかもしれない。いずれにせよ、いい加減な追試実験の量産による数の暴力を受けないためには、背後にある理論の構築が必須であり、理論なき研究からの脱却が最も重要なのではないだろうか。てなことを考えながら、統計的手法を学ぶことの重要性を痛感しつつ、このセミナーに参加して大変勉強になりました。

(きよなりとおこ・青山学院大学)



夏の合宿セミナー案内

新規事業委員会から、新企画第 2 弾に関する詳しいご案内をいただきました。当初のもくろみ通り 50 名の参加希望者が集まったとのこと。「社心の夏と言えど」という名企画に育つことを楽しみに、セミナーハウスへいらっしゃい！

「夏の合宿セミナー」ご案内

稲増一憲

新規事業委員会は、春の方法論セミナーに引き続いて夏の合宿セミナーを開催します。このセミナーのコンセプトは、(主に)若手会員に「夢や元気を与える」場をつくることです。

ところがこれは、なかなかどうして難しい。たとえ講師の方々から素晴らしいお話を伺ったところで、「あの人は自分とは世界がまるで違う」と思われてしまうとすれば、若手会員の夢も元気もかえって萎んでしまうのではないのでしょうか。そうだとすれば合宿に参加する 2 日間で論文を書いていた方が有意義かもしれません。

したがって、合宿という場を開くからには、この機会を最大限に活かして、参加者と講師の方々が密接に関わる少人数のセミナーを多く設ける必要があります。もちろん、今年産ぶ声をあげたばかりの委員会活動ですから、予算を湯水のように投入して高額謝礼で講師をたくさん集める、というわけにはいきません。となると、「研究・教育・学内業務 etc. etc. etc. で大変忙しい中、後進を育てるために一肌脱いでも良い」という志だけで集まってくださる社会心理学者が必要なわけです。そんな方々がどれだけいるのでしょうか。

しかも、いくら物理的には近い距離で過ごそうと、若手会員が講師を遠巻きに仰ぎ見る状況になったのではせっかくの合宿の意義は半減してしまいます。となると、国内外で活躍する第一線の

研究者でありながら、たとえ相手が大学院生であっても真剣勝負の議論を挑むような社会心理学者が必要なわけです。そんな方々がどれだけいるのでしょうか。新規事業委員会では、このような夏合宿セミナーで求められる社会心理学者像を良い意味で「大人げない」という言葉で表現しました。果たして社会心理学会には「大人げない」方々がどれだけいるのでしょうか。

若手会員にとって大変幸運なことに、社会心理学会にはたくさんの「大人げない」方々がいらっしゃいました。招聘講演ならびに分科会セミナーの討論者を引き受けてくださった榊美知子氏と村山航氏、討論者を引き受けて下さった石井敬子氏、石黒格氏、大坪庸介氏、清成透子氏、竹村幸祐氏、樋口匡貴氏、平石界氏、三浦麻子氏の 10 名です。あとは、会員のみなさんが夏合宿セミナーに恐れず飛び込んで、議論を交わして下さるのを待つのみです。

そして、今回講師をお願いした先生方以外にも、「大人げない」方々はたくさんいらっしゃいます。今年の夏合宿セミナーが若手会員に「夢や元気を与える」ことに繋がれば、合宿はきっとこれからも行われていくことでしょう。もし、新規事業委員会の夢というものがあれば、この合宿で夢と元気をもらった若手会員が、将来第 xx 回夏合宿の場で、若手会員に夢と元気を与える役割を担うような社会心理学者へと成長することかもしれません。新規事業委員一同、8 月 29 日・30 日、八王子セミナーハウスでお待ちしています。(いなますかずのり・関西学院大学)

第 58 回公開シンポジウムへのお誘い

「カルト問題とマインド・コントロール論再考—今なお幻想の彼方へ惹かれる若者たち—」

第 58 回公開シンポジウム準備委員会 渡辺浪二

地下鉄サリン事件からすでに 20 年近い年月が経過し、カルト問題は終息し、過去の物語であるかのように感じられるかもしれませんが、しかし、それは誤りです。大学に入学する学生はサリン事件以後に誕生した時代になり、かつての事件は忘れ去られ、あろうことか今日においても、カルトという幻想の彼方に迷い込む若者がいるのです。メディアによって、オウム真理教の事件に関わった関係者の裁判が現実に行進しているが、この現実です。このような出来事に戸惑いと不安を感じますが、他にもオウム真理教や巨大なカルト集団のみならず、小規模な問題あるカルト的集団の世相を騒がす出来事は後を絶ちません。

このような現代において、カルト問題とその解明に寄与してきたマインド・コントロール論を、改めて考えてみることは意味があるものと思います。カルト集団も変容してきていますが、一方のマインド・コントロール論も当初の概念からさらなる発展を遂

げてきました。

今回のシンポジウムは、社会心理学会と日本脱カルト協会の共催という初の試みです。その狙いは、学術的、理論的な枠組みにとらわれることなく、すぐれて社会的事象である問題への関心を高め、その対策まで積極的に迫ることにあります。もちろん、学術的なマインド・コントロール論の発展と精緻化にも関心は向けられます。

このような目的のためには、理論と実践を兼ね備えた研究者がシンポジストには最適です。そこで、カルト問題に関係する様々な領域において活躍をされている、以下の 4 名の方々に登壇をお願いしました。西田公昭氏にはマインド・コントロール論を中心に最近のカルト問題について、太刀掛俊之氏には大学のカルト問題とその予防的施策について、紀藤正樹氏にはカルト問題近縁の問題と法律の見地からの提言を期待しています。安藤清志氏には、マインド・コントロール論の構築に当初から関与してきた立場か

ら、現状のカルト問題とマインド・コントロール論について指定討論をお願いしました。

会場校のフェリス女学院大学ですが、本学は横浜港の開港とともに開学した、女性のための国内最古の高等教育機関で、キリスト教を設立理念とする女子大学です。今回の企画は、本学の2名の教員(渡辺浪二/潮村公弘)が、社会心理学会のみならず脱カルト協会の関係者の皆さまからも多くのご協力をいただきまして準備を進めてまいりました。この場を借りてお礼申し上げます。

会場ですが、おそらく皆さまには「山手のフェリス—風光明媚な外人墓地、港が見える丘公園、中華街」等を期待されたかと思います。今回は諸般の事情で、山手には若干距離のある緑園キャンパスで開催させていただきます。どうか落胆なさらず、帰路にでもそちらにお寄りいただく予定でお越しいただければ幸いです。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

(わたなべなみじ・フェリス女学院大学)

《プログラム》

開催日時：2014年11月22日(土) 13:30～16:30

(13:00 開場予定)

会場：フェリス女学院大学緑園キャンパス キダーホール
(横浜駅より相鉄線 最寄り駅：「緑園都市」駅下車 徒歩5分)

話題提供：

1. 西田公昭氏 (立正大学)

「一般にも社会心理学者にも知って欲しい『カルト』と『マインド・コントロール』について」

2. 太刀掛俊之氏 (岡山大学)

「大学におけるカルト問題と予防教育の実践」

3. 紀藤正樹氏 (リンク総合法律事務所)

『マインド・コントロール』と『カルト』問題—免疫力のある社会に向けて—

指定討論：安藤清志氏 (東洋大学)

司会：渡辺浪二 (フェリス女学院大学)

《話題提供者より一言》

◎西田公昭氏より

大学キャンパスで、熊に注意みたいな“カルトに注意”というポスターを見た学生が「カルトってママなんのこと？」と問うたら、母親は「確か九官鳥みたいな名前の…、ほれオウムというのを聞いたことあるでしょう。私もよくわからないけれど、オセロの中島さんみたいに洗脳されてしまって、教祖の言いなりになってしまうんだって！こわいから気をつけな！」と答える。学生は「オウムは聞いたことあるよ。わかった！まだそんな怪しい団体があるんだね、気をつけるから大丈夫だよ！」と返す。さて、こんなやりとりで良いの



でしょうか。カルトとマインド・コントロールの問題は、今も終わらず、この春にも入学したての若者が常軌を逸した世界へと行ってしまっています。「身近にそんな話を聞かないので関心がない」では、ダメな社会心理学者だと思います。特に教職にある者ならこの問題を正しく理解し、このお母さんとはちがう話をしなくては欲しいのです。

◎太刀掛俊之氏より

これまで新入生対象のオリエンテーション科目において、地下鉄サリン事件をはじめとしたオウム真理教の事件について触れてきたが、最近ではこれらの事実について、学生たちの多くが知識を持ち合わせておらず、問いかけに対する反応も薄くなってきた。いま大学生となった世代が、自分たちが誕生する以前の出来事なので当然の話ではある。しかしながら、大学におけるカルト問題は依然として続いており、勧誘に関する調査データを示すことで、予防教育の必要性を示したい。また、過去の事実を紹介するだけでなく、心理学的素養の修得を目指した予防教育の実践例を紹介しながら、社会的責任を持った人材を輩出する教育の在り方を考える話題を提供していきたい。



◎紀藤正樹氏より

最近、事件の「風化」という言葉がよく使われる。もともとは「風化」とは、「地表の岩石が、気温・氷雪・空気・水などの物理的・化学的作用によって、次第に破壊されていくこと。また、その過程」を意味していた、これが転じて「ある出来事の生々しい記憶や印象が年月を経るに従い次第に薄れていくこと」を意味するようになった(いずれも「大辞泉」)。漢字で書くと一見「綺麗な言葉」だ。「風化」は、人々から「つらいこと」「見たくないこと」から目をそむけさせ、一種の「癒し効果」も与えてくれるが、他方、「風化」は、大切なことへの「無関心」も生み出していく。2011年3月に発生した、あの「東北大震災」の惨禍でさえ、原子力発電所の事故直後の恐怖は「風化」し、日本人は「無関心」となりつつある。まして1995年3月に発生した未曾有の「地下鉄サリン事件」ですら、遠い昔となっていく。今年は、1994年6月に発生した、「世界最初のサリンテロ」である松本サリン事件から20年目という節目の年なのに、だ。



しかしながら、この「無関心」の間にも、着実に「マインド・コントロール」の手法は、根を伸ばし、私たちの周りに広がり、着実に「被害」が広がっていく。「無関心」は、今、そして未来の「被害者」を見殺す、ことをも意味する。

私たちは、「マインド・コントロール」が、人々の人権を侵害し、そして、その連鎖が、人権を侵害する集団「カルト」を生み出すことに、いつまでも「関心」を持ち続ける必要がある。

2014 年度「大学院生・若手研究者海外学会発表支援制度」支援対象者の決定について

渉外担当常任理事 山口裕幸

この支援制度は、10 年前の 2004 年に制定され実施されてきた「大学院生海外学会発表支援制度規程」と「国際学会シンポジウム企画補助金制度規程」を統合する形で、本年度から新たに始まったものです。昨年度の総会での承認を受けて、昨年 11 月 17 日にメールニュースで募集開始のお知らせをして、今年の 3 月 31 日に応募を締め切りました。大学院生部門には 11 件、若手研究者部門には 9 件の応募がありました。

規定に従い、選考委員は担当常任理事の他に、理事から 2 名、一般会員から 2 名で構成しました。選考委員について、常任理事会で審議・承認していただいたのち、理事から木村堅一（九州名桜大学）、向田久美子（駒澤女子大学）、一般会員から辻本昌弘（東北大学）、山浦一保（立命館大学）の方々に選考審査にあたっていただきました。

2007 年度に作成され、2014 年度から若手研究者枠を加えて改訂された審査要領に従って、各選考委員に、(A)発表を予定している研究内容、(B)国際的な研究実績・国内における研究実績の総合評価の 2 点について 1~10 の 10 段階で評価していただきま

した。また、応募者と利害関係にある選考委員は当該応募者の評価を行わないことにしました。

2 種類の評価をもとに総合得点 (A×2+B) を算出し、全選考委員の総合得点を平均して、応募者の順位づけを行いました。そして、その順位づけにもとづき、選考委員で議論を行い、大学院生枠・若手研究者枠それぞれ上位 5 名ずつを補助対象の候補者とすることで合意しました。この候補者案を常任理事会に報告し、審議・承認していただいたのち、理事会に報告して審議・承認していただいて、5 月 26 日にメールニュースで会員の皆様にも報告しました。

今年の本制度による支援対象者とその発表題目、発表学会は、以下の通りです。なお、規定により、支援対象者に対する支援金額は、「航空運賃の半額+学会開催日数×5000 円」とし、上限を 20 万円とすることになっています。国際舞台での皆さんの活躍と研究の発展をお祈りしております。

(やまぐちひろゆき・九州大学)

<大学院生部門 (五十音順)>

いのうえ ゆみ

井上裕珠さん (一橋大学大学院社会学研究科D3)

The effect of reciprocal relationships on perceiving envy.

The 16th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology (Long Beach, CA, USA)

さくらいりょうすけ

櫻井良祐さん (東京大学大学院人文社会系研究科M2)

Fullfilled goal as license to indulge: The effects of ego depletion and recalling past goal achievement on self-regulation.

The 16th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology (Long Beach, CA, USA)

たまいりゅういち

玉井颯一さん (名古屋大学大学院教育発達科学研究科D1)

Why is ostracism endorsed? Evaluative legitimacy as a predictor of ostracism.

Association of Psychological Society (San Francisco, CA, USA)

なかじまみほ

中島実穂さん (東京大学大学院総合文化研究科M2)

Hardiness mediates the effect of self-rumination and self-reflection on depression.

European Association of Social Psychology General Meeting 2014 (Amsterdam, Netherland)

ひらしまたろう

平島太郎さん (名古屋大学大学院教育発達科学研究科D3)

The social networking motivations scale: Examining factorial and criterion validity.

The 26th Annual Convention of the Association for Psychological Science (San Francisco, CA, USA)

<若手研究者部門 (五十音順)>

いしいたつのり

石井辰典さん (東京成徳大学応用心理学部)

Self-projection as anchoring-and -adjustment processes.

The 36th Annual Meeting of the Cognitive Science Society (Quebec, Canada)

きのさだやすのり

紀ノ定保礼さん (大阪大学人間科学研究科・助教)

Trust in an approaching vehicle: Psychological processes during the estimation of time-to-contact at an intersection in Japan.

The 28th International Congress of Applied Psychology (Paris, France)

ごとうのぶひこ

後藤伸彦さん (Monash University Malaysia, School of Business, research Fellow)

Attribution of secondary emotions and belief in a just world: how they may compromise intergroup relations.

International Society for Justice Research Conference 2014 (New York, USA)

こみやあすか

小宮あすかさん (高知工科大学総合研究所制度設計工学研究センター)

Residential mobility and resource sharing.

The 16th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology (Long Beach, CA, USA)

はっとりょうすけ

服部陽介さん (京都学園大学人間文化学部)

Suppression intention foils distraction: Mediation effect of suppression intention on the relationship between depression and intrusive thoughts.

The 16th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology (Long Beach, CA, USA)

研究会紹介：名古屋社会心理学研究会

全国各地で開催されている研究会めぐりの旅。今回は名古屋社会心理学研究会のご紹介をお願いしました。Web サイトはドラゴンズカラーの青×白なんですよ。

名古屋社会心理学研究会 (NSP) のご紹介

五十嵐祐

名古屋社会心理学研究会

(通称 NSP) は、名古屋大学大学院教育発達科学研究科・社会心理学研究室 (通称 D-ゼミ) が主宰する研究会で、年に 3~4 回開催されています。名古屋大学の所在地である東海地区は、首都圏や関西地区と比べると大学の数も研究者の数も少なく、日常的

な研究交流の機会がどうしても限られてしまいます。NSP は、東海地区の社会心理学を志す学徒が集い、切磋琢磨するための場として、これまで多くの役割を果たしてきました。

NSP の特徴は、発表者が博士号取得直後の若手から第一線の研究者まで多岐にわたり、さらに東海地区だけではなく全国各地の研究者に発表を依頼していることです。そういった意味では「多種多様性」がひとつのキーワードになっています。フリースタイルの研究会も多い昨今ですが、NSP は、ポスターの作成から当日の案内までのさまざまな準備を、研究室の院生総出でこなしており、研究室の定例行事となっています。2 時間の研究会は、議論がヒートアップするとあっという間に時間が過ぎ去ってしまい、「続きは懇親会で」という流れが定番となっています。毎年 12 月の研究会は、全国各地から発表者をお招きし、発表会場もふだんの会議室から講義室へとスケールアップして、忘年会と銘打った夜の部も含め、多くの方々にご参加いただいています。

今回の原稿の執筆に際し、静岡大学の橋本剛先生に NSP の歴

史についてお伺いしたところ、「ぐるだいニュース」第 6 号 (1995 年 10 月) に当時の紹介記事が掲載されていると教えていただきました (ぜひリンク先をご覧ください)。NSP はもともと大橋正夫先生が始められた研究会ですが、橋本先生や私を含む D-ゼミ出身者にとっては、指導教員であり、当時の主宰者であった吉田俊和先生の「院生は閉じこもってらんで、第一線の研究者から最先端の研究を学ばんといかん!」というポリシーが、現在に至るまで色濃く反映されている印象があります。実際、懇親会での発表者の先生方との交流は、駆け出しの院生にとっては貴重な経験でした。

また、私の院生時代には「NSP ノート」なるものもあり、発表者だけでなく、出席者一覧も全て記録されていたように記憶しています。残念ながらノートの現物はもう見つからないのですが、NSP ではいち早くオンラインで過去の研究会の記録をまとめ、情報を発信し始めました (北折充隆先生が作成されたと思います)。こうしたアーカイブの構築は、10 年後、20 年後にますます価値が出てくるものであり、今後も継続していくつもりです。

名古屋から首都圏や関西地区の研究会へのアクセスは便利である反面、他所から研究会のために名古屋に足を運んでいただくことは、率直なところ、なかなかないのではと思います。NSP は、社会心理学会のメーリングリストでも開催のアナウンスを行っていますので、興味のある方はぜひご参加ください。今後は、東海地区のつながりを保つだけでなく、他の地区とのつながりを活性化し、過去・現在・未来のつながりを尊重し、さらには世界とのつながりを生み出していけるような研究会として、研究室一同、いろいろと知恵と工夫を凝らした運営を心がけていきたいと思っています。

(いがらしたすく・名古屋大学)

若手会員、声をあげる

今回は東京と大阪からお一方ずつのご寄稿をいただきました。いずれも精力的な研究活動ぶりが見えるような内容です。

潜在測度研究のススム

私は潜在測度を用い、偏見とステレオタイプ
の非意識的過程を明らかにすることを研究の
メインテーマとしています。Greenwald が IAT
を開発して以来、潜在測度を使った研究はポピ
ュラーとなりました。せつかくの機会ですので、
潜在測度の研究者として名乗りを上げつつ、使

石井国雄



っている潜在測度を宣伝させていただきたいと思っ

ている潜在測度を宣伝させていただきたいと思っ
Sequential Priming Task (SPT) プライム刺激 (例、おんな)
の呈示が、ターゲット語 (例、やさしい) への語彙判断を促進す
るか、という点から概念活性を測定します。活性化を導くプロセ
スが明快なのが利点です。私が首都大の沼崎誠先生の下で最初
に関わったプロジェクトで使ったので一番思い入れがあります。一
方で、修論の実験で散々使って一度も結果が出せなかったのも、
因縁の測度でもあります (きちんと思った通りの結果が出せるよ

うになったのは博士課程の2年生になってからでした)。

当時は沼崎ゼミでも潜在測度を使うのが初めてで、いろいろと挑戦的な試みを行いました。最終的にプライムが2×2の4種類、ターゲットが2×2×2の8種類の計32の組み合わせ(!)に及ぼす影響を調べた研究を行いました(沼崎ゼミの研究がどんどん要因が複雑になったのは、ここから始まったのかもしれませんが)。また、首都大で担当した演習では、関下 SPT に関する実験を首都大と一橋の学生・院生と一緒に行いました。

SPT は、欧米では非常にポピュラーですが、日本語は言語的に特殊なことから、日本では少々扱いが難しい測度です。たとえば、漢字、ひらがな、カタカナの3通りがあり、概念のアクセシビリティを測定する際、どれが適切なのかというのは問題です(「優しい」の活性化は、「優しい」「やさしい」「ヤサシイ」のどれで測定すべき?)。一方、アルファベットのみの欧米は SPT と相性がいいでしょう。そのほか、プライム・ターゲットの呈示方法、刺激の大きさ、などなど、とにかく統制が難しいのも特徴です。その分、研究者の腕が試される測度です。最近では SPT の一種として Payne の作成した AMP が流行っていますが、そちらの方が扱いやすいみたいですね。SPT の手引きについては、沼崎先生の 2003 年度～2005 年度科研費報告書が詳しいです。

Implicit Association Test (IAT) 対象概念(例、花 vs. 虫)と属性概念(好き vs. 嫌い)の組み合わせ判断の速度から、概念の連合強度を調べる課題です。使い勝手の良さ、結果がよく出ることから、最も使われる潜在測度ではないでしょうか。IAT については Project Implicit のサイトが詳しいです。デモとして実際に IAT を受けることもできます。

修論で SPT の結果のでなさに絶望して、IAT に手を出したら結果が出まくったという経緯があります。PC での個別実験の印象がありますが、紙筆版を用いて集団で実施することもできます。ちなみに、首都大のオープンキャンパスで高校生相手に IAT のデモをしたことがあります。その時、みなさんが真剣そうな目で取り組んでいたのが印象的でした(沼崎先生にはのどが枯れるまでディブリーフィングをしてもらいました)。

IAT 効果は状況要因に敏感という点の特徴です。これまで、自己価値への脅威や病気情報を呈示したり、男の子にピンク色の白衣を着させたりして、IAT 効果の影響を調べています。これが面白いくらい効果が変わることがあります。また、呈示する刺激の特徴を変えることでも効果は大きく変わります。ここまで変わりすぎると、潜在ってなんだろう、という疑問も湧くくらいです。以前は、潜在的認知は変わりにくく、状況差がみられにくいと言われていましたが、今ではむしろ、潜在的認知の方が変わりやすく、顕在的認知の方が変わりにくいような印象を持っています。

IAT の弱点は、測定する概念の曖昧さです。たとえば自尊心 IAT の場合、自己と他者に対する好ましさの連合を測定しますが、自己とポジティブが結びついたのか、他者とネガティブが結びつい

たのか、など現象を区別することができません。散々使っておきながらあまり好きでないのがこの点です。ちなみに、こうした点を改善したシングルカテゴリ IAT もあります。

おわりに

さて、潜在測度の一端についてご紹介しましたが、潜在測度はやればやるほど面白いです。顕在測度もそうですが、潜在測度は測定したい概念を見極めた上で、対応した測度を用いたいですね。石井の web ページもぜひご参照ください。

(いししくにお・明治学院大学)

実験的統制と生態学的妥当性

紀ノ定保礼

私は、社会心理学と認知心理学をベースに、交通環境における認知・行動のメカニズムの解明に係る研究に従事しています。日常・現実環境における人間行動の解明を目指すことで、ヒトを理解するための一助となるとともに、交通安全に貢献できればと考えています。まず以下に、私がこの研究に取り組むことになった経緯を説明したいと思います。

卒論では認知心理学が専門の研究室で、運動の制御メカニズムに関する研究を行いました。実験的統制を重んじ、美しく整えられた状況下で仮説を検証する過程がとても面白く、実験というものにハマるのに時間はかかりませんでした。しかし同時に、胸の中に渦巻いてきた思いがありました。それは、「生態学的妥当性も重視したい」ということです。私は Wikipedia のハイパーリンクを辿り続けるだけで一日潰せるほどインドアな人間ですが、日常の環境そのものや、その中で生きるヒトにとっても関心があります。世界はとても生き生きとしていて、線画で描画するにはもったいないくらいに鮮やかです。心理学実験的には“ノイジー”ですが、ヒトはこの“ノイズ”の中で全く無規則的に行動している訳ではないと思います。私は、このような“ノイズ”を捨象するのではなく、むしろ日常・現実環境の中におけるヒトの認知や行動のメカニズムを理解したいと思いました。もしかしたらそれらは、基礎的な実験や理論で十分に説明できるのかもしれませんが、でももし、そうでないのならば? そうであるか否か自体、明らかではないのではないかと。これまで捨象してきた環境の特性、つまり生態学的環境にしか存在しない要因が、ヒトの認知や行動に及ぼす影響が大きかったとしたら? 海外ドラマ 24-TWENTY FOUR-を本当に約 24 時間で観終えたことがあるほどインドアな私ですが、そう考えたら実験室を飛び出さずにはいられなかったのです。特に車が好きというわけではありませんでしたが、大学院では認知心理学的な研究と相性が良い交通行動をテーマに研究を行いました。幸運なことに、大学院進学当初から多くの先生方のフィールド実験にスタッフとして参加する機会をいただき、この領域の型を学ぶ機会に恵まれました。

Wickens, Hollands, Parasuraman, & Banbury (2013) の Engineering

Psychology & Human Performance(4th ed)には次のような記述があります。「統計的な効果 (statistical significance) だけでなく、実際的な効果 (practical significance) も重視しなければ、基礎的な知見や理論を現場に適用 (scale up) させることはできない。厳密な統制により効果を検証することも重要だが、そのような効果は現場では簡単に消失 (wash out) されてしまう」。私はこの言葉に 100 % 同意するわけではありませんが、日常・現実環境におけるヒトの行動の予測力を高めるためには、実験的統制と生態学的妥当性を両立させる方法を模索しなければならないと改めて感じました。私がよく行う方法は、自動車教習所内のコースにおけるフィールド実験です。完全にリアルな環境とはいえませんが、隔絶された環境内で特定の交通状況を模擬できる利点はとても大きいと感じています。通常実験室で使用するような機材をえっちらおっちらフィールドに運びだし、msec 単位で参加者の視覚情報を制御したり、反応を取得したりしています。一番の悩みの種は天候です。天気予報では晴れるはずだったのに雨粒を感じて実験中止、そのまま天候が回復せず、手ぶらで帰途に就くことも珍しくありません。なんとも効率が悪いと我ながら呆れることもありますが、苦心した分だけ仮説が支持された時の喜びも一入です。昨年度の院生リーグでは、これまでに行ってきたフィールド実験の成果を発表し、多くの方から手厳しくも有りがたい、貴重なご意見をいただくことができました。やはり突っ込まれどころは、実験的統制が緩くなったことに起因する代替説明可能性。より良いデザインを目指して、改良を続けていかなければならないと、身が引き締まる思いでした。

さて、ここまで生態学的妥当性、実験的妥当性と言ってきましたが、社会心理学の研究では、実験室実験や質問紙調査で仮説の理論的妥当性を確認したのちに、現実環境に近いところで再現性を確認する、という手続きをとる研究も多いと思います。もしかしたらここまで書いてきた内容は、当たり前のことなのかもしれません。しかし誤解を恐れずに書くと、私の印象としては仮説の正しさを「生態学的環境でも確認する」という目的でフィールド実験が行われることが多く、フィールドに飛び出すことで操作

可能な要因をデザインに盛り込もうとする研究は、決して多くはないように感じています。私自身もかつて、質問紙調査により心的要因が横断行動に影響を与えることを確認したのちに (Kinosada & Usui, 2012)、フィールド実験で同様の仮説を検証してみたことがあります (紀ノ定・臼井, 2011)、横断者の心的要因と環境の物理的特性 (この研究では接近車両の速度) の間には、交互作用効果が認められました。つまり、接近速度という生態学的環境にしか存在しない要因をデザインに取り入れることで、理論の適用範囲が見定められたと考えられます。心理学系の雑誌には、投稿規定に theoretical implication という文言が盛り込まれていることが多いと思いますが、現場に近いところでデータを取ることで、応用的な貢献可能性が高くなるだけでなく、従来の理論の限界を指摘し、理論の修正や拡張に貢献できるのではないかと思います。もちろん、繰り返しになりますが、生態学的妥当性を重視することで、厳密な実験的統制が難しくなることもあります。基礎・応用問わず、色々な方と継続的に議論することで、実験的統制と生態学的妥当性のバランスの問題に関して、これからも考えていきたいと思っています。

「人間を対象にデータを取るっていうのは、ほんま面白いんやわ」。これは、卒論ゼミ配属後の親睦会で恩師から言われた言葉で、私が最も気に入っている言葉の一つです。この言葉を借りて、私はこう主張したいと思います。「現場に近いところでデータを取るっていうのは、ほんま面白いんやわ」。現代社会では、我々が生きる環境の様相は日々変化を続けています。交通環境は特にその傾向が強く、工学的な運転支援技術が急速に開発され、導入されようとしています。研究計画を考えているうちに次々に画期的な技術が公表され、世界の歩みの速さに冷や汗をかくこともしばしばです。そんな、躍動感に満ちたこの世界で生きるヒトに、私は興味が尽きません。この世界は“ノイジー”であるがゆえに、一つの視点ではなく多角的な視点から現場の現象を捉えなければならぬのに、私の眼は二つしかありません。ぜひ一緒に、日常・現実環境におけるヒトの理解に迫ってみませんか。

(きのさだやすのり・大阪大学)

* * * *

常任理事交代に関する公告

今井芳昭常任理事 (渉外担当) は、平成 26 年 3 月 12 日、一身上の都合により常任理事を退任しました。理事は継続します。日本社会心理学会役員選挙規程の第 8 条第 6 項のイにより、選挙管理委員会からの山口裕幸氏の繰り上げ当選の報告に基づいて、同年 3 月 24 日付、同氏が常任理事 (渉外担当) に就任しました。任期は平成 27 年 3 月 31 日まで。

会員異動

(2014年3月11日～2014年6月10日)

■新入会員

《正会員》

・一般会員

池田功毅 (中京大学大学院心理学研究科研究員)、岩倉 希 (日本大学文理学部研究員)、大方潤一郎 (東京大学高齢社会総合研究機構機構長)、大澤眞一郎 (行橋記念病院医局常勤医)、落合春一 (首都大学東京大学院人文科学研究科)、久木田 純 (国際連合児童基金(UNICEF)駐カザフスタン事務所事務局長 (Country Representative))、栗田聡子 (大阪経済大学講師)、小島英子 ((独)国立環境研究所資源循環・廃棄物研究センター客員研究員)、島田将喜 (帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科講師)、SCHUG Joanna (Department of Psychology, College of William & Mary, Assistant Professor)、David Dalsky (京都大学国際高等教育院附属国際学術言語教育センター准教授)、竇 雪 (慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所専任講師)、藤原佑貴 (科学警察研究所犯罪行動科学部少年研究室)、松田与理子 (ひとエナジー研究所代表)、宮川愛由 (京都大学大学院工学研究科都市社会工学専攻助教)、村田明日香 (北海道大学社会科学実験研究センター)、山口隼ノ介 (青山学芸心理)、山根郁子 (株式会社日本経営協会総合研究所組織行動部門研究員)

・大学院生

天野美穂子 (東京大学大学院学際情報学府)、新井里奈子 (東京女子大学大学院人間科学研究科)、伊藤詩菜 (北海道大学大学院教育学院教育心理学講座)、井ノ川侷果 (筑波大学大学院人間総合科学研究科心理専攻)、岩谷舟真 (東京大学大学院人文社会系研究科)、上林憲司 (一橋大学大学院社会学研究科)、王 璋 (広島大学大学院総合科学研究科)、大家 慧 (北海道大学文学研究科人間システム科学専攻)、太田 碧 (法政大学大学院人文科学研究科)、大吉健洋 (筑波大学大学院システム情報工学研究科)、岡田真波 (東京大学大学院人文社会系研究科)、小俣克之 (名古屋大学大学院環境学研究科社会環境学専攻)、片桐英毅 (学習院大学大学院経営学研究科)、川喜田水希 (立命館大学スポー

ツ健康科学研究科)、川端祐一郎 (京都大学大学院工学研究科都市社会工学専攻)、河村悠太 (京都大学大学院教育学研究科)、神田真里 (京都大学大学院人間・環境学研究科)、北村伊都子 (青山学院大学大学院国際政治経済研究科)、金城卓司 (北海道大学大学院文学研究科人間システム科学専攻)、國政朱里 (青山学院大学社会情報学研究科)、高 遠 (東京大学大学院教育学研究科)、江 暉 (東京大学大学院学際情報学府)、後藤彩花 (九州大学大学院人間環境学府行動システム専攻)、小西直喜 (神戸大学大学院人文学研究科)、小西信義 (北海道大学大学院 文学研究科)、小林 翼 (北海道大学大学院文学研究科)、小林麻衣子 (筑波大学人間総合科学研究科)、齋藤美松 (東京大学大学院人文社会系研究科)、榊原良太 (東京大学大学院教育学研究科)、佐山七生 (法政大学大学院人文科学研究科)、渋谷 恵 (お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科)、竹ヶ原靖子 (東北大学大学院教育学研究科)、武上雅紗世 (一橋大学社会学研究科)、田代実希 (立命館大学大学院スポーツ健康科学研究科)、谷本奈穂 (一橋大学大学院社会学研究科)、豊島 彩 (大阪大学人間科学研究科)、中尾聡史 (京都大学大学院工学研究科)、中島一稀 (首都大学東京人文科学研究科人間科学専攻)、中村早希 (関西学院大学大学院文学研究科)、長谷和久 (同志社大学心理学研究科)、仁科国之 (玉川大学脳科学研究科)、野村智之 (早稲田大学大学院人間科学研究科)、花野昌英 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)、浜本圭介 (関西大学大学院心理学研究科)、原田鈴彦 (東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻)、吹田 光 (法政大学人文科学研究科心理学専攻)、二木 望 (東京大学大学院人文社会系研究科)、法 ケイ (大阪大学人間科学研究科)、堀本美都子 (神戸大学大学院国際文化研究科)、本郷亜維子 (放送大学大学院文化科学研究科)、松木敦志 (筑波大学人間総合科学研究科生涯発達専攻)、松本真実 (千葉大学大学院人文社会系研究科)、松本龍児 (東京大学大学院人文社会系研究科)、湊 麻由佳 (東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻)、盛 恵理子 (帝京科学大学大学院理工学研究科)、山口文恵 (広島大学大学院総合科学研究科)、山本佑実 (関西

大学大学院心理学研究科)、楊 帆 (一橋大学大学院社会学研究科)、ALMEIDA Igor (京都大学大学院人間・環境研究科)《準会員》

下川照代 (早稲田大学人間科学部人間環境学科)

■退会

秋山弘子、飯干隆寛、池田政子、井上 徹、井下 理、射場元気、岩渕将士、大下知世、小河妙子、加藤 司、狩野素朗、木村美由紀、京野千穂、小玉一樹、小松瑞歩、小谷野邦子、小山祥明、斎藤 朗、佐藤静一、佐藤潤美、佐藤広弥、澤 成都子、下島裕美、菅原康二 (物故)、杉下守男、杉田洋子、杉野珠理、鈴木淑元、平 雄之、高橋真知子、武井友希、田中泉、津曲陽子、津留 寛、中園晴貴、永田忠夫、長田真美、長谷川真里、長谷川由加子、波多野礼佳、濱 保久、平賀明子、平川奈々、福島和郎、房岡純子、藤原珠江、牧野由美子、松田奈緒子、宮崎貴子、宮田千聖、森成健史、山形恭子、吉田敏明

■所属変更

宇佐美まゆみ (東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授)、田中宏二 (広島文化学園大学教育学研究科教授)、倉元直樹 (東北大学高度教養教育・学生支援機構)、寺井あすか (東京工業大学社会理工学研究科)、林 洋一郎 (慶應義塾大学大学院経営管理研究科)、柳澤さおり (西南学院大学教授)、中村雅子 (東京都市大学メディア情報学部)、原島雅之 (愛国学院大学人間文化学部講師)、吉村 英 (京都女子大学文学部発達教育学部)、野崎瑞樹 (東北文化学園大学医療福祉学部准教授)、小池はるか (東海大学短期大学部児童教育学科)、稲葉昭英 (慶應義塾大学文学部教授)、石盛真徳 (追手門学院大学経営学部)、品田瑞穂 (東京学芸大学総合教育科学系教育心理学講座准教授)、内藤伊都子 (東京福祉大学教育学部)、有沢孝治 (東海大学文学部心理・社会学科)、三沢 良 (奈良大学社会学部心理学科講師)、山田 歩 (滋賀県立大学助教)、吉澤寛之 (岐阜大学大学院教育学研究科教職実践開発専攻)、竹村幸祐 (滋賀大学経済学部准教授)、横田晋大 (総合研究大学院大学ポスドク研究員)、花井友美 (帝京大学経済学部観光経営学科講師)、橋本冬子 (日本大学文

理学部人文科学研究所)、小森めぐみ(四天王寺大学人文社会学部社会学科専任講師)、黒川雅幸(愛知教育大学教育学部講師)、中島美奈子(名古屋大学国際教育交流本部国際教育交流センター)、前村奈央佳(神戸市外国語大学専任講師)、家島明彦(大阪大学教育学習支援センター講師)、藤井恭子(関西学院大学教育学部)、亀山晶子(日本大学文理学部人文科学研究所研究員)、田島 祥(東海大学)、志岐裕子(慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所)、大和田智文(関西福祉大学発達教育学部准教授)、犬飼佳吾(大阪大学社会経済研究所助教)、稲垣佑典(情報・システム研究機構統計数理研究所特任研究員)、吉武久美子(長崎純心大学人文学部児童保育学科)、川上正浩(大阪樟蔭女子大学心理学部心理学教授)、片岡 祥(西南学院大学助手)、引地博之(千葉大学予防医学センター)、小宮あすか(高知工科大学総合研究所制度設計工学研究センター)、松尾 藍(大妻女子大学人間関係学部助手)、田端拓哉(大阪市立大学大学院文学研究科都市文化センター研究員)、谷 芳恵(兵庫教育大学特別支援教育モデル研究開発室研究補佐員)、高橋幸子(東洋大学21世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター)、浅野良輔(浜松医科大学子どもこころの発達研究センター特任助教)、三村憲弘(武蔵野大学法学部政治学科講師)、長内優樹(吉備国際大学大学院)、服部陽介(京都学園大学人間文化学部)、瀧澤 純(ノースアジア大学法学部専任講師)、蔵永瞳(就実短期大学幼児教育学科)、荒井紀一郎(首都大学東京都市教養学部法学系准教授)、藤原 健(大阪経済大学人間科

学部講師)、栗田季佳(三重大学教育学部)、後藤伸彦(School of Business, Monash University Malaysia)、板山 昂(関西国際大学人間科学部助教)、川嶋健太郎(東海学院大学)、船越理沙(岩手県立大学大学院社会福祉学研究科研究生)、藤井 勉(Sungshin Women's University)、寺田未来(大手前大学)、山田竜平(立正大学心理学部非常勤講師)、諸上詩帆(横浜商科大学商学部商学科専任講師)、中嶋智史(NTTコミュニケーション科学基礎研究所人間情報研究部)、沼田 潤(同志社大学高等研究教育機構及び社会学部助手)、伊藤 言(東京大学大学院人文社会系研究科・日本学術振興会)、吉澤英里(環太平洋大学次世代教育部教育経営学科講師)、大崎裕子(成蹊大学アジア太平洋研究センター特別研究員)、中山 真(鈴鹿短期大学生活コミュニケーション学科助教)、寺本水羽(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科)、稲垣亮子(名古屋市立大学大学院人間文化研究科)、山口千晶(神戸大学)、竹本圭佑(東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻)、土井孝典(駿河台大学心理カウンセリングセンター助手)、塩谷芳也(東北大学知の創出センター特任助教)、新岡陽光(法政大学大学院人文科学研究科)、遠藤伸太郎(中央大学理工学部人間総合理工学科教育技術員)、伊藤ゆかり(大阪大学国際教育交流センター准教授)、澤山郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)、鈴木伸哉(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)、永野惣一(東京障害者職業センター)、鉄川大健(帝塚山大学大学院心理科学研究科)、本山美希((株)エイベック研究所メディアデザイン本部)

『社会心理学研究』掲載予定論文

■第30巻第1号(2014年8月刊行予定)

《原著》

鈴木公啓「新しいシルエット図による若年女性のボディイメージと身体意識の関連についての再検討」

《資料》

小池はるか・高木 彩・北折充隆「後部座席のシートベルト着用義務化に関する縦断的研究」

■第30巻第2号(2014年11月刊行予定)

《原著》

広田すみれ「事故・災害生起確率の空間・時間表現によるリスク認知の違い」

池内裕美「人はなぜモノを溜め込むのか：ホーディング傾向尺度の作成とアニミズムとの関連性の検討」

杉浦仁美・坂田桐子・清水裕士「集団と個人の地位が社会的支配志向性に及ぼす影響」

鈴木貴久・小林哲郎「評判生成規範の類型がパーソナル・ネットワークのサイズに及ぼす効果」

金祐祐司「自己ならびに他者への信念や期待が社会へのイメージと将来への時間的展望に及ぼす影響」

編集後記

サッカーW杯2014 たけなわ。ミラノ・ローマ・トリノ・バルセロナと欧州各地で観戦経験がありますが、いずれも阪神甲子園球場と似た雰囲気、チーム愛を共有した人々による祝祭の場であると感じました。そうそう、札幌ドームの日ハムファンも強烈だったなあ。というわけで See you in Sapporo!! (asarin)

メール・ニュースの広告募集

日本社会心理学会メール・ニュースに掲載する広告を随時募集しております。掲載を希望される方は、日本社会心理学会事務局までご連絡ください。

E-mail : jssp-post@bunken.co.jp

掲載料：1件(1回あたり)1,000円(後日事務局より請求書をお送りします。)